

フランスの革命運動 一八一五—七二(二)

ジョン・プラムナツツ
高村忠成(訳)

第二章 復古王政

第一節 ルイー一八世の即位

(1) 王政の復活

ブルボン家が復活した一八一四年と一八一五年当時、フランスはどのような国家であったのだろうか。共和派や民主派はいたのであろうか。また、ロベスピエールが失脚してから二〇年たったが急進派は残っていたのであろうか。

おそらくフランス国民は、第一帝政末期の時よりも、政治に関心をもっていたものと思われる。共和国については悪い思い出が残っているし、ブルボン家については殆ど忘れ去られていた。ブルボン家の信奉者たちは、殆どフランス国外にいた。ブルボン家を信じている人々とは、亡命貴族や意志堅固な僧たちであり、彼らは王政が消滅してしまふと辛酸を嘗めなければならなくなるので、王政にしがみついていた。しかし、フランスを破った外国の王国でさえ

も、ブルボン家について覚えている国はなかった。一七九二年以後、事件があまりにも目まぐるしく起こったため、ヨーロッパでは、二二年があつたという間に過ぎ去ってしまった感じがしたのである。

だが、こうした状況は、ブルボン家にひとつの大きな利点をもたらした。すなわち、ブルボン家に対して脅威を懐くものがいなかったのである。封建制はすでに廃止されていたし、最初の革命の時に財産は新しい所有者の手に移ってしまっていた。国王を殺した人々にも処罰はなされなかった。だから人々の目には、二〇年以上も前に起こったさまざまな事件が、今また、再発するようには思えなかったのである。ナポレオンは敗北して再起不能だし、共和国は金持ちと農民が恐れているので復活はありえなかった。恐怖政治は、フランスに共和国に対するアレルギーを与えていた。じつに、共和制に対する抵抗感をなくすためには、一世代以上の努力が必要であるかのような印象を与えていたのである。

一八一四年当時、同盟国には、フランスにブルボン家を強いて復活させようという意図はなかった。ルイ一八世が侵略者のあとにパリに戻ったのは、一八一五年、彼の第二次復古の時であった。一八一四年に、ルイ一八世をフランス国王にすべきだと同盟国に説得したのは、ほんの一握りのフランス人であった。すなわち、ナポレオン帝政下で財産をつくり、増殖した銀行家、高級官僚そして軍人たちであった。彼らは同盟国に対して、ブルボン家はまだ人気があるということを証明し、また、王政を復活させると再び革命と戦争を招くのではないかと懸念しているロシア皇帝を説得し、その不安の除去につとめたのである。

この計画を推進したのは、タレイラン、フーシエ、銀行家ラフィットらであった。マルモン元帥は、ラフィットと会見した後、皇帝を見捨て、フォンテーヌブローで彼に退位を迫った。これら金持ちの名の通った人々、軍人、閣僚、銀行家、元老院議員たちは、すでにナポレオンにはなんの恩義も感じていなかった。というのは、ナポレオンはたしかに彼らの財産を作ってあげたかもしれないが、しかし同時に、彼はそれらの人々の虚栄心を傷つけてしまったから

である。ナポレオンは厳格、粗雑で、安寧をもたらしてくる主人ではなかった。それに対して彼らは、もはや平和と自分たちの巨額の富を享受できる機会を失いたくなかった。そのうえ、強大な皇帝よりも、自分たちの助けを借りなければ、権力を維持できないような脆弱な主人の方が自分たちには都合がよかったのである。

このようにルイ一八世は、ナポレオンに仕えた人々のおかげで玉座に復活することができた。彼は、その恩を忘れるような人物ではなかった。彼はフランスに憲法を下賜した。それは大変保守的な憲法であったが、彼が報酬を与えたかった金持ちの野心的な人々から見ると、十分自由主義的なものであった。彼は、長時間かけてやっと手にした玉座を失いたくなかった。そのため、ナポレオンを見捨てた人々を、彼の大事な味方としたのである。彼らは、頭の回転が速く、経験豊かで、世間の道理にたけていた。彼らは一貫してフランスに止まり、過去二五年間、この国がどういう経験をしてきたかということを知っていた。彼らが、ルイ一八世の復帰は可能であると判断し、彼を助ける気になった以上、ルイ一八世には、過去をほじくり返したり、彼らに異議を唱えるつもりなど、全くなかったのである。

ところが、こうしたルイと彼の新しい友人たちにとって不幸なことは、国王が一人で帰国しなかったことにある。国王とともに、何千人もの亡命者、貴族、そして僧侶など、多くの革命の犠牲者たちが戻ってきたのである。彼らは、フランス人が自分たちに対して行った不正を正してくれることを望んだ。帰国した時から発せられる彼らの異常な言葉や脅しは、人々を恐怖に陥れた。じつに彼らこそ、ややもすると無関心になりがちなフランスを覚醒させることのできた唯一の人々であった。彼らにとって復古王政は、居心地がよく安住できた。ナポレオンはエルバ島に流されており、危険性はなかった。亡命貴族は、革命によって多大の利益を手にした二つの階級、すなわち、農民と中産階級に恐怖心を与えた。

こうした中で、ナポレオンが再び好機をつかんだ。彼はフランスを去る時は、多くの人々から悲しまれもせずに出ていったが、数ヵ月後、今度は再び熱狂的な歓迎を受けた。再度亡命を余儀なくされた亡命貴族たちは、ナポレオン

に激しい噴りを懐いた。ワートルローのあと、彼らは「白色テロ」により、新憲法下での最初の議会選挙を勝利したのである。

(2) 政治集団の動向

① 超王党派と自由派

復古王政期のフランス政治史は、煎じ詰めると、亡命貴族と僧侶のグループが、上層中産階級と権力闘争を展開したという、二つの少数集団間の争いの記録でしかないと言ってよい。前者は超王党派、後者は自由派として知られている。超王党派も、議会制度は受け入れた。というのは、国王がそれを樹立したからである。だが、超王党派は、「国王が自分で授与した特権は、自らそれをすべて無効にできる権力を有する」と主張した。これに対して自由派は、「議会政治は根本原理であり、国王は憲法を否定する権利はもたない」と反駁した。この点が両派の大きく食い違ふところであった。ルイ一八世はこの両派のうち、超王党派を信用せず、彼らの愚行を懸念した。そのため自由派は、しばしば王党派よりも国王権力のよき擁護者になったのである。

この二つの政治小集団が、それでも議会政治の規則を無視して、いたずらに政治的駆け引きに明け暮れていた時、フランスの他の集団の動向はどうであったのであろうか。結論的にいうと、フランスは一般的には無関心であった。

② 農民

農民は、自分の土地が脅かされない限り、政治には関心をもたなかった。農民が明確な目標をもって積極的に政治に関与してくるのは、一九世紀末になってからである。農民がナポレオンに好意を寄せていたことは明らかである。農民は、少なくともナポレオンについてはよく知っていたし、彼には強い印象を懐いていた。こうした点を考えると、

農民が政治的に敏感になるのは、恐怖心が働いた時であるといえる。具体的にいうと二つの恐怖である。ひとつは、政府が帰国した亡命貴族を満足させるため、自分たち農民の土地をなんらかの形で取り上げてしまうのではないかという恐怖。もうひとつは、信仰心も慈悲心もない血に飢えた狼ぜき者であるパリの共和派が、再びフランスを牛耳るのではないかという恐怖である。農民が、とくに後者の恐怖によって悩まされるようになるのは、一八四八年以降である。前者の恐怖は、一八一五年以後、年々その恐れはなくなっていく。一八一五年から一八四八年までの間、農民は農耕に精を出した。彼らはだれにも迷惑をかけず、また、だれからも煩わされることなく過ごすことができたのである。

③ 労働者

一七九二年から一七九四年にかけて、共和派をただ一人、一生懸命支持した下層中産階級や都市の労働者たちも、さしあたって目立った活動はしなかった。数のうえでは前二者より少なかったブルジョアジーは、一七九四年以後、ナポレオンの呪文に魅せられていった。しかし、ナポレオン皇帝は、近年、追い込まれていたため、自分を支持するブルジョアジーのために、行動する力をやや失っていた。労働者たちの行動は、農民以上に静かで不可解であった。ロベスピエールの没落以後、労働者のことが話題になることは殆んどなかった。

当局は、恐怖政治時代の労働者の補助的だが看過できない役割を決して忘れなかった。ナポレオンの警察は、彼らを特別警戒し、ナポレオン法典は彼らを冷遇した。過去二〇年間に、実質賃金は少しずつ低下していた。亡命貴族を除くすべてのフランス人の中で、労働者の生活水準だけが、一七八九年以前よりもはるかに低くなっていた。労働者は紛れもなく困窮階級であった。しかも、ロベスピエールと山獄派が彼らに味方したため、フランスでは彼らに同情する人は殆どいなかったのである。

④ 共和派

もし共和主義がフランスで影響力を発揮しようとするならば、それは最初の革命の時に、それを受け入れようと熱心に準備した階級や集団の心をとらえなくてはならなかった。共和主義は、かつて自らが誕生した原点に立ち戻る必要があったのである。しかし、今回は前回よりも前進が困難であった。というのは、一七九二年当時は、フランスには共和派がわずかしかいなかったし、共和派を恐れ嫌う人も見あたらなかったからである。一八一五年には、共和派の数は少なかったが、恐怖政治を覚えている人々はまだおり、彼らを憎悪していたのである。

共和派は、一八一五年から一八三〇年にかけてはそれほど発展はしなかった。とはいえ、彼らは軟弱で愚かな国王シャルル一〇世が憲法を破壊しようとするのを阻止したり、また、強制的に彼を退位させてしまうくらい力はもっていた。ナポレオンの没落以後、約三〇年間は、フランスにおいて行動的な政治勢力は、すべて弱体であった。フランスの十分の九は、政治的に無関心で、社会的には保守的であった。革命を行うことは難しくなかったし、革命を行っても、その国を大混乱に陥れるようには思えなかった。恐らくこうしたことが、共和派には幸いしたのであろう。というのは、一八三〇年以後共和派は革命を行ったが、しかしその時彼らは、以前のような危険な行動には出なかったし、態度もむしろ尊敬されるように気を配ったからである。

一八一五年当時、フランスの唯一の共和派はわずかばかりの老人たちであった。かつての国民公会、コミューン、そしてクラブなどの残存者たちであった。彼らは、ナポレオンに与しなかった。そのため二〇年間、無力な存在と化していた。かつての黄金時代からの、もしくは、共和派伝説がつくられるとすぐ黄金時代のように見えた時代からの、それら残存者たちは、まずパリ大学の学生の中に自分たちの意思を継ぐ人を見い出そうとした。彼らは言葉で伝統を伝えた。パリの学生たちが、フリーメイソンの庇護のもと、最初の共和的な結社を結成したのは一八一八年九月であった。この結社、あるいは「真理の友」とよばれたフリーメイソンの地方支部を創設したのは、学生のバザールであっ

た。こうした経緯からいって、一九世紀のフランスで、最初に共和派の組織をつくったのはパリの学生たちであったといえる。しかも、彼らは革命家でもあった。支部結成後二年もたたないうちに、バザールとその友人は、六百人の武装した学生が参加する予定であった暴動を企画した。警察がその陰謀を事前に察知したため、それは実行されなかったが、共和主義が再興するや、それがすぐ武力行動を起こそうとした意味は大きいといえよう。

⑤ 炭焼党

学生たちは、最初の陰謀が失敗しても挫けなかった。「真理の友」の二人がナポリに行き、当時ナポリのブルボン家に対する革命に成果を収めていた「炭焼党」の組織を研究した。彼らは帰国すると、バザールとともにフランス「炭焼党」を結成した。この新しい組織は、学生や共和派に限らず、多少の陰謀とか暴力を恐れない反体制分子ならば、だれでも加入が認められた。

「炭焼党」は急速に拡大した。そのメンバーは、当初の共和派よりも、やがてボナパルト派の方が多くなった。「炭焼党」員には、下層中産階級の出身者が多かった。彼らは貧しい学生か、または、かつての帝国軍隊の下士官か、ブルボン家や亡命貴族にはあきあきした社会的身分の低い人々であった。ただ現実問題として、メンバーに労働者はいなかった。

「炭焼党」には原則も綱領もなかった。その党は、メンバーの希望ではなく、失意と憤慨とを表明していた。党は、復古王政に反対した。亡命貴族を嫌い、教会を疑った。その党は、最初の革命以来、フランスに残存していた感情の産物であった。すなわち、その感情とは、特権や過剰な富を憎み、ナポレオンのもとでかってフランスが味った高位へとフランスを押し上げることを阻止してきた世襲制度でえらくなった人々を軽侮（ナポレオン時代は、最も卑しい人々が最もすばらしい生涯をおくることのできた）し、かつ、聖職者の権限拡大に反対する気持である。一八一五年

から一八七一年にかけて、フランスの共和派を鼓舞してきたのは、何か特別なビジョンや教義というよりも、こうした感情だったのである。

「炭焼党」は革命をめざす団体であった。その組織は、すばやく多くの小集団に分かれることができるように工夫されていた。各集団はわずか二〇人ほどで編成されており、その小単位は「ヴァンテ」とよばれた。それは、二〇を意味するイタリア語 *venti* から名付けられたものである。組織の頂点には「最高ヴァンテ」があり、次に「中央ヴァンテ」、その下に最低段階として「個別ヴァンテ」が設けられた。この小集団においては、同じ段階にあるヴァンテ同士が横の連絡をとることは禁じられており、つねにその上位の集団とのみ直接連繫をとるように決められていた。したがって集団が違っていると、メンバーはおたがいにくわからなかった。こうした組織形態にすることによって、中央の統制が秘密裏に、また効率的になされることができたのである。

⑥ 自由派と炭焼党

「炭焼党」が飛躍的な発展を遂げた一八二二年当時、自由派は超王党派との議会をめぐる争いで敗北を期しつつあった。小教に限定された有権者は、おそらくやや過激な、先の読めない行動をとる自由派よりも、超王党派の方を選んだのである。しかし、超王党派は、ワートルローのすぐあと、県や地方の行政組織に広く自分たちの勢力を浸透させるため、「白色テロ」を行った。彼らは、臆病な有権者には圧迫を加えればよいと考えたのである。超王党派に押され気味の自由派は、政治組織を支配できなくなるのではないかと恐れた。だが同時に自由派は、国王が超王党派を嫌悪しているということを知った。それは、国王が自分がすでに制限君主制をとり入れたからというのではなく、超王党派の行きすぎた行動によってまた革命が起こり、自分が玉座を追われてしまうのではないかと恐れたからである。国王は年をとっており、まもなく超王党派の領袖と自認しているその弟が玉座を継ぐ予定になっていた。再度の革命

により、玉座を追われることを心配する国王ルイ一八世に、自由派は急拠、「国王の懸念は十分予想されるところである」といって扇ったのである。もちろん自由派も、もし超党派派がフランスの絶対的な支配者になったならば、革命が起こることは間違いないと確信していた。そこで自由派が考えた最善の策は、革命家と同盟を結ぶことであった。彼らは、「炭焼党」こそ王朝を打倒する運命をもった組織であると信じ、それに加担した。そして、ラファイエットにその領袖になって欲しい旨要請したのである。

「炭焼党」は、もうひとつの純粋なボナパルト派の革命組織、「自由の騎士」と共に暴動の準備をした。それは、一八二一年一二月、フランス全土で一斉蜂起する予定であった。しかしその計画は失敗した。あまりにも野心的で、しかも陰謀者の何人かが事前に逮捕されてしまったからである。数カ所で蜂起があったが、簡単に鎮圧されてしまった。政府は陰謀者たちを罰しようとしたが、その際、ラファイエットや自由派の指導者たちのような重要人物には手を下さなかった。上層指導部が罰せられなかったことは、当然、下位の人々の間に、上層部に対する不信感を巻き起こした。そして、下位の者だけが苦難にたたされるような陰謀には失望し、人々はそれから手を引いていったのである。

⑦ サン・シモン派の台頭

大がかりな計画に失敗した「炭焼党」は、破滅せざるをえなかった。同党の破滅は、自由派と共和派のすべての関係が、七月革命の直前まで切断されることになったということの意味した。同党の破滅は、さらに次の二つの重要な結果を招いた。ひとつは、「炭焼党」の中でつねに最も行動的で冒険的であった学生の考え方を、陰謀を企てるという方向から社会理論の方向へと転換させたことであり、もうひとつは、学生に、同盟の相手は自由派ではなく、労働者であるということを認識させたことである。

「炭焼党」の創設者バザールは、サン・シモンの弟子になった。彼はサン・シモンの死後弟子入りしたわけだが、すぐに弟子の中で最も影響力と説得力をもつ人物になった。サン・シモンは、彼の生存中、自分の説教を信奉する人をわずかししか残せなかった。しかも、そのうちの何人かは、彼の神秘主義を受け入れられなくなり、彼が死ぬ前にもとを去っていった。一八二五年、彼が死去するとすぐに、残っていた忠実な弟子たちの中にバザールとアンファンタンが仲間入りしてきた。二人の、人々を魅了する力と行政能力は、サン・シモンのそれよりもはるかに優れていたのである。

この新しい指導者のもとで、サン・シモンの弟子たちは、神秘主義者と知識人からなる集団を形成した。彼らは、人気をえようなどとは考えていなかったが、しかし、その集団は、フランスの社会主義のあらゆる学派の中で最も影響力のあるものになっていった。彼らは次々と雑誌を発刊した。それらはすべて短命に終わったが、しかし、それら冒險的な出版活動の中で、とくに重要なものは、彼らがパリで行った一連の講義をまとめたものであった。それは、『サン・シモン教義の解説』という題名で発刊された。講義を中心的に行い、実際に解説したのはバザールであった。彼は師の教説を解説しながら、自分なりにそれを解釈し、最終的にそれをわかりやすく、簡潔にまとめたのである。サン・シモンに対するバザールの姿勢は、マルクスに尽したエンゲルスの態度以上のものであった。マルクスは、結局は一箇の偉大なジャーナリストであり、政治・社会問題を端的に解説した人であった。これに対してサン・シモンは、彼の獨創性や頭の切れのよさにもかかわらず、いうことはまどろっこしく、退屈で、釈然としないところがあった。

やがてバザールが去り、アンファンタンがサン・シモン学派、ないし派のただ一人の教父になった時、その集団は、合理主義を放棄した。集団を真剣に支えていた多くのまじめな人々にとって、嘆かわしいことに集団は、馬鹿げたことを仰々しく行うようになったのである。バザールがいた頃は、たとえ集団が感情に走るようなことがあっても、批

判的な知性は保持していた。サン・シモン学派の人氣はなかった。それは、労働者や下層中産階級の中ですら支持者をえられなかった。その学派は、いつも知識人を相手にアピールしていた。ここでいう知識人とは、まじめであれ愚かであれ、われわれが、今日、文化人とよぶ類の人々である。

サン・シモン派は大きくなることはなく、すぐに馬鹿げた集団に墮してしまつたが、それでもその集団は、当時としてはかなりの重要性をもっていた。同派に魅せられた人々の多くは、後に同派と縁を切ることが多かつた。同派に入つて、通常一、二年、ないしは、数ヵ月で去つていく人が多かつた。サン・シモンの教説には、人々にその教説のために生き、また、そのために死ぬというような感動を与えるものはなかつた。しかしそれでも、彼の教説や弟子のそれは、フランス社会主義がマルクス主義の影響を受けるようになる以前においては、フランス社会主義の歴史において、最も影響力のある理論であつたのである。

サン・シモンもバザールもアイディアに富んだ人であつた。二人とも弟子を生涯自分たちに仕えさせたり、聴衆の尊敬を勝ちとつたりすることは不得手であつたが、人々の社会的良心を覚醒したり、ヨーロッパの各政府がめつたに、いな決して関心をもつことのなかつたような諸問題に人々の目を向けさせることにおいて力を発揮した。マルクスでさえ、他のどの社会主義学者からよりも、サン・シモンから多くのことを学んだのである。

サン・シモンの信奉者たちも、また、それ以上に実現の可能性のない空想的な社会理論を説くフーリエとその弟子たちも、七月王政以前においては、政治的にそれほど重要な存在ではなかつた。彼らの思想は広まっていはなかつた。しかし、それはまだ、フランスの選ばれた、ごく少数の人々だけしか呼吸できない空気のようなものでしかなかつた。その思想が、人々を政治行動に駆りたてることができるようになるためには、その思想を加工し、労働者の願望や恐怖に切実に訴えるものをもつように調理することが必要であつた。すなわち、思想というためらいを感じてしまうような人々が、何の抵抗もなく反応できる、丁度スローガンのようなものに轉換させる必要があつたのである。七月王

政の時に、この思想改造がなされた。サン・シモンとフーリエは、その理論の獨創性、発想の豊かさ、精緻性という観点からいうと、フランスの社会主義者の中で最も卓越した思想家であるといえるが、しかし、労働者の間では、それほど重要な人物とは見られていなかった。労働者たちは、自分たちが必要としたスローガンを、一八三〇年の段階では、まだ無名であったカベ、ルイ・ブラン、プルドンなどの思想から作り上げていたのである。

⑧ 学生と労働者

「炭焼党」が失敗したあと、パリの労働者との連繫を考えるようになった活動的な学生たちは、サン・シモンの弟子ではなかった。むしろサン・シモンの教説に関心を寄せたのは、活発な政治活動を放棄した学生たちだった。労働者に接近した学生たちは、共和派であり、民主派であった。彼らは、労働者こそ自分たちの信義の厚い同盟者であり、自分たちと同じ位、快く危険を分担してくれるだろうと信じた。このことは、こうした学生たちが、労働者と知りあった時、すでに彼らは社会的な問題に関心をもち存在であったということの意味している。事実、学生たちは、すぐに労働者に対して同情を懐いた。そして学生たちは、自分たちの手元にすぐ使える理論を持っていなかったために、社会主義者にはなれなかったが、熱列たる社会改革者になったのである。

学生たちは、労働者を助けるための具体的な術はもちあわせていなかったが、しかし、人民の真実の政府というものは、その最初の義務として、労働者の運命を改善する使命を帯びているものであるということは確信していた。そして学生たちは、労働者に対して、共和政を意味する民主政の樹立以外に、労働者の真実の救済はないということを懸命に説得した。その結果、ついにパリにおいて、学生と労働者との間に同盟が成立したのである。かつ、社会主義やそれに類似した思想が人々の間に広まったのは、パリにおいて学生と労働者との間に同盟が生まれてからのことであつた。この両者の同盟は、民主主義と共和国の名のもとになされた軍事同盟のようなものであつたといえよう。

(1) 一八二〇年代半ばの革命的な動き

一八二〇年代の半ば頃は、共和派にとっては失意の時期であった。「炭焼党」は挫折し、サン・シモンの理論や労働者へのその喧伝は、希望にあふれ興奮にみちた行動を行っていたかつての時代の、せめてもの代替物になれば、というぐらゐのものでしかなかった。しかし、落胆期にあらうとも、共和派は革命の準備を決して怠らなかつた。彼らは秘密結社を組織し、一八二七年一月にはパリの暴動に参加した。その時、一七世紀以来（フロンドの乱以来）はじめて、バリケードが街頭につくられたのである。

① プランキ

一九世紀の最も有名な、二一才の行動的な青年革命家、プランキがはじめて当時の政府に対して武器を構えたのは、一八二七年一月であった。プランキは、天性の職業革命家であり、恐らくその第一号であらう。彼は、長い生涯の大半を（彼は一八八一年に死んだ）獄中か、または陰謀による暴動の中で過ごした。一八二七年当時、彼はまだ学生であり社会主義者ではなかつた。彼が社会主義に走ったのは、それから七、八年後のことである。彼が革命家になったのは、バブーフの陰謀の時の生存者の一人であるブオナロッチの影響を受けてからである。プランキは、フランスに多かつた革命家といわれる人々の中でも、その完全な手本といってよかつた。一八二七年、彼は何のために戦うかという理論的根拠もはっきりしないまま、ある闘争に参加した。彼が思想を得たのは、その数年後であり、その時でさえも、その思想はできるだけ短く、またできればない方がよいとの考えであつた。この点については、後にもう少し詳しく述べることにしよう。

一八二七年一月、ブランキはバリケードで三度負傷した。だが彼は、初心者の好運を享受し、投獄されずにすんだ。彼は脱がれ、すぐ後に全寮制女学校の教師になった。そこで彼は、生徒の一人と恋をし、後に結婚したのである。

② 自由主義派の再生

これら初期の秘密結社や労働者・学生の暴動は、恐るべき出来事というようなものではなかった。学生と労働者が、最も脆弱で最も人気のないフランス国王を、打倒できるまでになるには、彼らが昔から締結していた自由主義派との同盟関係を刷新する必要があった。しかし、自由主義派は、その頃には一〇年前とは比較にならない程強力になり、自立していた。自由主義派の若い世代は、古い世代よりも行動的で民主的、また冒険心に富んでいた。古い世代の自由主義派は、「超党派派の抵抗は強力で、その抵抗力を殺ぐには、政治から特定の党派の利益優先主義や腐敗を除去しなければならぬ」と信じていた。

若い世代は、この利己主義と腐敗を減じるためには、選挙権を拡大する以外にないと確信した。これら若き自由主義派とモラリストたちは、『グローブ』と『ナショナル』という二つの新聞を創刊した。両紙とも、フランスの政治上、重要な役割を果たした。同じ頃、フランス革命とナポレオンの時代についての最初の歴史書と回顧録が発刊された。これらの書物は、パリだけではなく、フランス中の学生、ジャーナリスト、法律家、知識人、若い教養のある階級の人々などに、大きな影響を与えた。こうした階級の人々こそ、もし復興ブルボン王朝が永続を願うならば、最も頼りにしなければならない存在であったのである。

結局、フランスの歴史の中で最も興味深く、最も誉れ高い期間のことについて書いたこれら初期の歴史家たちは、それほど昔ではない過去の偉大な人物に対する自分たちの憧憬の念を、包み隠すことなく率直に表現した。ナポレオンについて殆ど覚えていない、また、めったに第一共和政の話などを聞く機会がなくなった若い読者層は、こうした書

物から鮮烈な印象を受けた。彼らは、人口比においては多数ではなかったが、しかし、まもなく制限された有権者の中でも、かなりの部分を占めるようになることは間違いない。彼らがいうには、フランスは今やイギリスに範を求めた議会王制になった。だがそのためにフランスは、以前よりも活気がなくなり、腐敗し、敵にとって手ごわい存在ではなくなってしまった。フランスは、本来、独自の歴史、独自の正義・平等・よき政府についての考えを持っていたはずである。

民主主義者や愛国主義者たちのように、それら青年たちは、イギリスから教訓をえることを好まなかった。フランスを破った同盟軍の中心がイギリスであったということも、全般的な状況を悪化させていた。すなわち、イギリス人を模範にすることなどは、許されざることであったのである。一九世紀のフランスにおいては、国家への愛よりも、ブルボン家や議会王制に対する愛の方がはるかに強かった。愛国心を懐いていたのは、ボナパルト派か、または共和主義派か、いずれかであった。フランスの貴族や僧は、母国が自分たちを冷遇したとしても、母国には時として献身的に尽した。しかし、貴族や僧の母国に対する献身さはあつたかもしれないが、それでも、近代フランスの愛国主義という、何か旧王朝や教会に対する敵愾心というようなものがあつたことは事実である。その原因は、ひとつには、フランス史において最も光輝満つ時に、亡命貴族や僧までもがフランスの敵に回ったこと、もうひとつには、貴族や僧が、ブルボン家に忠誠を尽くすことはフランスに楯つくことになるというような時でさえ、ブルボン家に忠誠を尽くすということに求められよう。したがって、愛国的な感情が吹き出すということは、ブルボン家にとってはつねに危険なことであった。じつに愛国主義的なフランス人にとっては、七月革命は、絶対主義的になる恐れのある王政を倒しただけではなく、ワテールローに対する復讐の行為でもあつたのである。

③ 自由派と共和派の同盟

炭焼党の蜂起の失敗によって共和派と自由派の同盟関係は崩れたが、革命が起こるためには、その同盟関係が復活する必要があった。だが、この両派は互いに嫌悪しあっていた。両派にとって共通の敵とは、本来超王党派であるにもかかわらず、両派は互いに不信、遺恨、軽侮の念などを懐きあっていた。そのために、感情的に歩みよる余地はなかったのである。こうした自由派と共和派を同盟させた最初のきっかけは、反動に対する脅威であった。炭焼党はその同盟の最初の成果であるとともに、最初の犠牲者でもあった。一八二〇年に両派は、反動に対する恐怖心を懐いたことがあったが、今回はそれよりもはるかに強いものであった。両派は、もはや互いに唾み合っているどころではなくなり、同盟を結ばざるをえなくなったのである。それでも両派が反目をなくし、団結するようになったのは、一八三〇年になってからである。

(2) 保守派の動向

① ヴィレール伯

一八二〇年代の初め、超王党派は同派の中で唯一人、本当の政治家といえるヴィレール伯をその指導者とした。ヴィレール伯は、一八一五年当時はまだ熱烈な王党派であった。彼は自分が生まれながらにして所屬している階級に、最大の忠誠をつねに尽していた。しかし、一八一五年から一八二二年にかけて、彼が首相になった時、彼は思索する時間をもった。彼の忠誠心と反感はまだ同一のものであった。すなわち、変化したのは彼のフランスについての理解であり、彼のフランスに対する感情はあまり変わらなかった。彼は自分の階級と、それと同盟を結んでいる教会のために、自分のできることは何でもやろうと決意した。しかし彼は、他の超王党派たちとは少し考え方を異にしていた。というのは、超王党派たちはフランスに帰国した時、自分たちが希望したことはすべて実現しようと思っていたが、ヴィ

レールは、そのようなことは今ではもはや不可能である、と感じたのである。彼は、いわば穩健勢力となった。ルイ一八世の統治の末期に、もし超王党派の行動に何らかの賢明と思えるふしのあるものが見られるとするならば、それはヴィレールの力によるところが大きいといってよいであろう。

② シャルル一〇世の即位

一八二四年九月、ルイ一八世が死去した。彼の後を継いだのはシャルル一〇世であったが、彼は超王党派の實質的な指導者であり、また、「革命から何も学ばず、革命前のことを何も忘れず」ということのできる最初のフランス、ブルボン家の指導者であった。新しい国王シャルル一〇世は、先代の王である彼の兄と同様に、玉座に上った時はすでに高齢であった。年齢は、彼に人間としての円熟味は与えていたが、しかし、しみついてしまっている固定観念を崩すことは不可能にしていた。

ヴィレールは、彼が首相になる以前は正統王党派であり貴族であったが、首相になってからは考え方が王党派の中では穩健になっていった。しかし、彼はシャルル一〇世が即位すると、新しい主人を喜ばせるために反動的な政策を取るようになった。また、シャルル一〇世が国王に就任すると、自分たちの土地を取り戻したいという気持ちを泣く泣く放棄した亡命貴族たちが、失った土地の代償に何かをもらいたいと要求するようになった。その結果、亡命貴族たちには百億フランが賠償金として支払われることになった。この金額は、ローンやその他の方法で徴収されることになったが、はっきりしていたことは、この取引に伴う負担は中産階級が背負わねばならない、ということであった。

中産階級、とくに上層中産階級は、自由派に代表者を送っていたが、彼らは他のどの階級よりも革命から多くの利益をえていた。もし超王党派の要求が正当なものであるとするならば、その要求は、それを満たすのに最もふさわしい人々によってなされるべきである。そのように決まったとしても、それは決して不合理なことではない。しかし、

自由派は、自分たちの財産に対して加えられることになるこの攻撃的な措置に対しては断固反対で、それに抵抗できることは何でもやろうとの決意に震いたたつたのである。

③ 教会の状況

新国王の即位は、僧侶たちにも希望を与えた。教会は、まだ人々の心の中に深く根を張っていた。実際問題として、フランスには、王党派、ボナパルト派、そして、共和派よりもはるかに善良なカトリック派が存在していたのである。しかし、だからといって、教会が多くの人々から信頼されていたというわけではない。カトリック教徒の財産や物質的利益に直接影響をおよぼす措置を別にする、有利であれ不利であれ、教会に対する立法ほど、フランス人の関心と呼んだものはなかった。但し、教会に対するフランス人の態度は非常に多岐にわたるため、教会への措置がどのような結果を招くかを予見することは容易ではなかった。

④ 農民の動き

農民は、司祭や過去から受け継がれてきた単純な信条、儀式などに忠実であった。反聖職者主義という考え方は、一九世紀末までは農民の間には一般的には見られなかったといつてよい。だからといって農民が、教養のあるカトリック教徒が真剣に考えている問題に対して関心をもっていたというわけではない。むしろ無関心であった。農民が日常的に接触するのは自分たちの教区の司祭でしかなかった。宗教秩序に対して何が起きているのか、司祭が存続すること、財産を相続すること、また、学校を開設すること、などが許されたのかどうか。教会での法王の権威は弱体化しているのか、それとも強まっているのか。教養のある、篤信のカトリック教徒ならば、すべて無関心ではいられないこれらの問題についても、農民たちにとってはどうでもよかったのである。

最初の革命の時、農民が共和国政府に対して反抗したのは、ひとつには、信念を曲げない司祭に対して政府が過酷な仕打ちをしたからであった。しかし、一九世紀には、フランス国家は、修道院に住んでいない在俗聖職者にはなにも手を出さなかった。すなわち、国家は農民の宗教的感情をさかなでするようなことは何もしなかったのである。さらに、国家が宗教的秩序に対して行ったことは、ずっと後になるまで、すなわち、共和派が農村で広汎な支持をかちえるようになるまで、農民を刺激することはなかったのである。

⑤ 上層中産階級の対応

一九世紀後半、過激な共和派や社会主義派と対抗するには、できるだけ味方を増やさなくてはならないと感じた上層中産階級は、教会と和解することにした。だが、一八一五年から三〇年にかけての上層中産階級は、一七八九年の革命が一八世紀から継承してきた反教権主義を固く信奉していた。彼らは、まだヴォルテールの弟子だったのである。彼らは、富裕階級の子弟しか入学できない大学や中等教育機関が、教会によって支配されることを恐れていた。そのため彼らは、宗教的儀式や高僧を危険視した。とくに、高僧のもつ政府に対する影響力や政治的野心の大きさは、教区司祭の比ではなかった。超王党派が教会と密接な関係をもっていただけに、上層中産階級の高僧たちを恐れる気持は強かったのである。

⑥ 貴族の反応

革命が起こる前までは、貴族たちは自分たちの子供や兄弟たちが、教会から恩恵を受けていたにもかかわらず、中産階級と同じようにヴォルテールを読み、それを楽しんでた。貴族たちはまた、宗教は良い教育を受けられない貧しい人々にとっては、最善のものであると信じていた。しかし、革命が勃発すると、彼らは教会とともに、苦痛を受

けることになった。同時に、人々は自分たちには愛着をもっていないが、教会には強い愛着を懐いているということに気がついた。貴族たちは、今や、自分たちがトップの座をしめていた古い社会を崩壊させたのは、宗教の衰退であると信ずるようになった。彼らは、教会の勢力と威信を回復するために、できることは何でもやらなくてはならなかった。そして、彼らのリーダーがフランス国王になった時、自分たちにも運が向いてきたと確信したのである。

(3) 革命の勃発

① 複合的状況

シャルル一〇世と超王党派は、なるべく憲法手続きにしたがって、自分たちの活路を開きたいと思っていた。ヴィレルは、すでに数年間にわたって、フランスにおいてただ一人、活発な政治活動を展開していた。貴族的というよりもブルジョア的な小さなサークルを、言葉巧みに話しかけたり、または、脅したりすることによって、うまく操縦していた。ヴィレルは成功したのに、なぜシャルル一〇世はヴィレルの援護を受けていながら、失敗してしまっただのであろうか。それは、反動という薬の不快感を弱めることをあまりしなかったことと、あまり激しい抵抗をしなかった臆病な自由派が、最後はその反動の薬を吸ってしまったことにある。シャルル一〇世が見落していたことは、国王ルイ一八世は穩健でおもしろみのない人物であったが、ヴィレルがつねに彼を補佐し、助言をしていたということである。とくにヴィレルは、慎重で注意深くことを運んでいた。

当時、たとえフランス国家が強力になっていたとはいえ、勝手気ままに一〇万人もの有権者を威圧したり脅迫したりすることは不可能であった。有権者といえば、裕福な高額納税者であったから、亡命貴族たちにしてみれば、自分たちの失った財産を、彼らが補填すべきではないかという気持が強かった。自由派は、下層中産階級や労働者階級が国王の政策に対して反対運動を起こしたことによって、勢いづけられた。下層中産階級は、その多くがボナパルト派

か共和派であった。すなわち、ボナパルト派も共和派も、教会はナポレオンか、または、だれか反教権派のような人々の監視のもとに置かれるべきである、と信じていた。労働者、とくにパリの労働者は、すでに共和派になっており、彼らは教会に対してなされた、または、なされようとしている政府の新たな譲歩に対しては激しい憤りを感じていたのである。

有権者には、貴族よりもむしろブルジョアの方が多かったので、超王党派が有権者を牛耳るためにはブルジョアに対しての恐怖心を煽るしかなかった。ヴィレールも超王党派のこの態度をある程度容認した。だが同時に彼は、この恐怖心があまりに大きくなりすぎて、有権者を混乱させるようなことがあれば、それはかえってよくないと気を配った。しかし、この反動に対する恐怖心は、ヴィレールの懸念通り、どんどん拡大していった。有権者の大半を占める裕福な実業家たちは、知事や警察署長に対する不満よりも、最終的には、反動的な法律がもたらすであろう結果におびえた。自由主義の復活と反動に対するブルジョア級の恐怖心がもたらした結果は、政府を怒らせ、政府にかえってこれまで以上に敵しい、次のような徹底した措置をとらせることになってしまったのである。

まず、ブルジョア級にとって、反動と社会革命の両方から自分たちの身を守ってくれる、大変貴重な組織であるパリ国防軍が、一八二七年四月に廃止された。また、検閲制度がその二ヵ月後に復活した。次に、政府は議会を解散した。議会選挙では、反動に対する恐怖におびえる有権者が、国王が満足するような投票をしてくれるだろうとの政府側の思惑が働いていたにもかかわらず、実際には有権者は、自分たちにとどのような圧力や陰謀が加えられようとも、自由派が再び過半数を制するようになる投票を行ったからである。

② 一八二七年の選挙以後

一八二七年の選挙結果をみて、シャルル一〇世は、合憲的な方法をもってしては自分の活路を見い出すことはも

やできないと思った。自由派のリーダーたちは、その選挙の結果をみて、たとえ上層中産階級が数のうえで勝っていても、まだ選挙権を与えられていない階級の人々の精神的な支持をえなくては、国王や超王党派を圧倒することはできないと考えた。

シャルル一〇世は、しばらくの間、自分の一切の行動に気をもんでくれる側近の意見を、一部とり入れるようになった。彼はヴィレールを罷免し、自由派の支持をえている穏健王党派の内閣の存在を一九ヵ月間許した。しかし、一八二九年四月、彼はその内閣に変えて、非常に反動的な内閣を組閣した。その結果、立憲政治は早晚崩壊するだろうと予想された。プログリエの言葉ではないが、国民は政府の額にクーデタと記されているのを見たのである。一八三〇年三月、両院が開会されると議会はすぐに、二二一対一八一で、国王に内閣の交替を要求する奉答文を可決した。数日後、国王は議会を停会し、さらに五月一六日、彼は下院を解散して新たに選挙をするように命じたのである。

超王党派と野党との戦いは、二二一名の野党議員を再選する結果となり、同議員たちは、国王に対して攻撃的な奉答文を提出することに決めた。自由派は、彼らの再選を確実なものにしようとは決意し、超王党派はそれを阻止しようとした。王党派の新聞は、もし有権者が二二一名の犯罪者を選出するならば、その行為は有権者のもつ投票権を放棄するに等しいと非難した。有権者には、国王が拒否するような代議員を選出する権利はないというのである。シャルル一〇世自身、有権者に声明文を出し、自分が安心して協力できるような人を選出してくれるように要請した。ポリニャック首相の見解を代弁していた『リュニベルセル』紙は、国王の声明が出されたからには、再選をめざす二二一名のものは、すべて自動的に反逆者の汚名をきるようになるかと警告した。国王とポリニャックは、右派が完勝することを期待した。しかし、勝利を収めたのは野党自由派であり、その議席数は、与党の二倍にも達したのである。

選挙で敗北しても国王はめげなかった。有権者といってもその大半は、ひと握りの階級の人々でしかなかったからである。しかもそれは、小規模で利己的な、国民の間では人気のない少数派であった。ちょうどこのような時、フラ

ンス軍がアルジェリアを占領した。そのためシャルル一〇世は、もし今、自分がクーデタを行えば、国民はそれを認めてくれるであろうと確信した。シャルル一〇世は、ルイ一六世が玉座を失った時の様子を覚えていた。彼は、ルイ一六世が玉座を追われたのは迷ったからであり、必要な時に断固たる態度をとらなかつたことに原因があると信じていた。いかなる場合にあって、大胆であるということがすべてであった。シャルル一〇世とポリニャックは、この信念のままに振舞った。そして、七月二六日、彼らは議會を解散し、選挙法を改正した。そして、新しい選挙を指令し、出版を停止する勅令を發表したのである。

③ 七月二七、二八、二九日

もとよりクーデタが行われることは、早い時期から予想されていた。自由派は迅速に行動し、味方の共和派は誠実にそれを支援した。青年自由派の機関紙『ナショナル』は、号外を発行し、納税者に税金の支払いを拒否するように訴えた。さらに同紙は、ティエールをはじめ何人かが準備した声明文を掲載した。そこには、「合法的な政府はもはや存在しない。フランスにあるのは暴力の支配だけである」と謳われていた。自由派は、王朝が崩壊してしまうことは望まなかつた。自由派の希望は、暴力のことが公然と話題となり、それを国王が恐れ、その結果、国王がポリニャックを罷免すればそれでよい、というものであった。

自由派は、自分たちの同盟者である共和派をあまり高く評価していなかつた。一八三〇年一月末、『トゥリユービオン』紙の編集長であるラファイエットとオーギュスト・ファブルをリーダーとする学生組織が結成された。それは、戦いぬくことを決議した。組織の実際の指導者であるファブルは、七月二七日の夕方、パリの街頭にバリケードをつくるように命令した。学生たちが先導する所では、労働者たちもそれに続いた。そしてあつという間に、パリの一二区内に十二の委員会が生まれ、そこを中心に抵抗の準備がなされた。食物、武器、弾薬を戦闘者に送る体制が整えら

れたのである。

政府は、武装した抵抗がなされることは予想していなかった。そのため、その抵抗を排除する処置がとられた時は、すでに手遅れであった。七月二八日の夕方までに、パリの東側一帯は、反乱者の手に落ち、翌二九日、政府はパリを逃れた。その段階で自由派の代議員は、初めて公然と反乱者と手を結んだ。自由派と共和派は、かつてブルボン家の復活を推進した銀行家ラフィットの家で会合をもったのである。

席上、ラファイエットが復活した国民軍の指揮官に任ぜられ、また、すでに反乱者の手に落ちている軍の指揮権を引き継ぐ一人の将軍が指名された。さらに、裕福で、人格高潔な人々からなる五人の市委員が任命され、彼らがパリの政府を引き継いだ。ラファイエットは人民に声明を発表したが、その中では、シャルル一〇世のことについても共和国のことについてもふれていなかった。国王は、自分が攻撃されていることを知る以前から、すでにパリの支配権を失っていたのである。しかも、パリ以外には、彼のために戦うことを望んでいるものはだれもいなかった。もはや彼には、できるだけ早くフランスから亡命する以外に道は残されていなかったのである。

※本稿は、JOHN PLAMENATZ, *The Revolutionary movement in France 1815-71* (LONDON・NEW YORK・TORONTO, 1952)の翻訳である。章以外の小見出しは訳者がつけた。

(一)は、「序論・第一章 大革命」。次回(三)は、「第三章 七月王政」である。